

春風の中に坐するが如し

荒見泰史

(一)

私が専門分野について尋ねられたときには、だいたいの場合「敦煌学」と答えることにしている。井上靖氏のベストセラー小説『敦煌』のおかげで「敦煌学」といえばある程度察しをつけてもらえると思うからである。

小説『敦煌』は、昭和 30 年代の古い作品ではあるが、新潮文庫の 100 冊にも入れられるほど長く読者を引きつけており、敦煌という地名や敦煌学のことを世に知らしめてくれている。小説の内容が史実に合わないなど細かな点が批判されることもあるが、我々の業界にとってはたいへんありがたい小説であることにはかわりがない。ただ近年はこの小説の法力がしだいに落ちてきて、若者にはあまり読まれていないようである。広島大学の講義でこの本の話をするときには毎回確認しているが、現在では広大生 100 人に 1 人も読んでいればよい方であろう。このような若者たちを相手にする場合は、私の専門分野は「敦煌シルクロード研究」と言い直され、長い注釈がつくことになる。

そのような時代でもあるので、念のために「敦煌学」について簡単に確認しておきたい。「敦煌学」とは、かつてのシルクロードの要衝、中国の西の玄関口である敦煌という辺境の町に残された遺跡や出土文物などの研究を指す。なぜそのような地域の名前を冠した学問が成り立つかと言えば、その遺跡や出土文物が他にはない膨大な研究資料を提供してくれているからである。具体的には、遺跡で言えばもっとも代表的なものが敦煌石窟群（莫高窟、榆林窟、西千仏洞、東千仏洞など）である。ここには何と 3000 体の仏像と 45,000 m²にも及ぶ 4 世紀から 11 世紀ころまでの壁画が残されているのである。出土文物として代表的なものは 1900 年に出土した写本群である。これもやはり 5 世紀から 11 世紀頃までのもので、所蔵機関の統計によれば 60,000 点を

超えるという途方もない量の資料である。ちなみにもともとはこの写本を研究する学問のみを指して敦煌学と呼んでいたのであるが、写本ばかりではなく石窟や壁画なども含めて総合的に研究したほうが都合がよいのは当然である。かくてこれらの両方を併せ研究されるように提唱されるようになり、現在の敦煌学ではこれらの壁画と文献の両方を資料として研究が行われているのである。

それでは、敦煌学とはこれらの資料を利用してどのような研究をしている学問なのか。壁画の題材は中国の伝承やインド伝来の仏教画、道教画から人々の生活に関することまでが描かれ、文献のほうも仏経、道経から儒家経典、文学作品、寺院文書、経済文書、韻書、外国語の教材からそれこそ本来後世に残すようなものではない猥褻な本までが含まれている。それこそ当時のありとあらゆる分野の本が雑然と残されているわけで、さまざまな方面での研究に利用が可能である。敦煌学の代表的な研究書より見ても「中国史」、「美術史」、「仏教研究」、「道教研究」、「儒家研究」、「小説研究」、「唐詩研究」、「文字学」などから始まって、「食品」、「囲碁」、「体育」、「書儀（手紙の書き方）」、「環境」、「地理」などまで、敦煌資料は本当にいろいろな方面の研究に利用されているのである。

私自身はといえば、そうした中でも仏教と文学にかかわる部分を中心に20年近く研究をしているが、敦煌資料の整理にもかかわってくるのでほかの分野の研究についても知らん顔をすることはできず、結局はいろいろな専門に首を突っ込んでいる。

最近とり組んでいる研究は、敦煌文献にみられる唱導文学文献の研究である。唱導文学というのは、日本文学発祥の研究の中で取り上げられた語で、柳田国男の「説話文学」を発展させた折口信夫の「唱導文学」という用語がもとになっている。宗教活動が文学の発祥に関係しているというそれまでの文学発展理論の発想から、日本では仏教の説教が文学発祥に影響を及ぼしていると考えたもので、根拠とされる文献には日本最古の説話集『日本霊異記』などがあげられている。このように紹介すると、唱導文学とはあくまでも日本文学の研究であって敦煌研究とは繋がりがあまりなさそうに思われるかもしれないが、実のところ折口の言う日本の唱導が盛んになっていった原因を

考える場合、中国や朝鮮半島からの影響を見過ごしにすることはできない。日本における『日本霊異記』の作成にしても、日本で自然発生的に始められたわけでは決してない。この時代の中国や朝鮮半島の状況を見てみると、確かに仏教の説教が盛んであったことは明らかで、八關齋、俗講などといわれる俗人相手の説教が大に行われ、それが芸能にまで発展していたこともわかっているのである。さらに言えば『日本霊異記』の参考になったと見られる文献の1つに『衆経要集金藏論』という中国伝来の本がある。この本は八世紀頃の興福寺本では『日本霊異記』の表側に書かれ、内容、体裁もほぼ一致しているため『日本霊異記』の成立に影響を及ぼしているものと考えられている。この『衆経要集金藏論』は、もとの中国では寺院内においてこれを台本として民衆相手に説教をしていたこともわかっている。先の敦煌文献はじつは仏教寺院に収蔵されていた文書だったものであるが、そうした寺院内文書が中心であるだけに「唱導資料」がたくさん含まれており、中国では佚書とされる『衆経要集金藏論』も最近になっていろいろな形で発見されているのである（最初に発見したのは他でもない私だが）。かくて、敦煌学は日本の唱導研究とはじつは密接な関係が有る訳である。

このような訳で、最近では私自身の研究もかなり幅が広がり面白くなってきている。日本の唱導研究の側からも、思いもかけず膨大な研究資料が見つかってきていることを歓迎してくれている。ただ、このような研究をさらに深化させていこうとすると、文献学、中国文学、仏教学ばかりか日本文学、日本民俗学などいろいろな専門知識が必要になってくる。最近では領域外であったはずの研究もいつの間にか自分の領域に入り込んできていて、嬉しい悲鳴ではあるが、私のまわりはなかなかたいへんなことになってきている。

(二)

今ではこのような研究を専門とするようになったが、もともとの入り口は漢文であった。大学では中国哲学、中国文学を専攻し、一年生の時から『論語』、『孟子』などを読まされ、図書館で注釈書を探してきては古典の内容を解釈させられるような授業が中心であった。大学入学の時点では普通の人か

ら見れば随分かわった専攻を選んだものだと言われそうであるが、このあたりには我が家の事情が多分に関係している。

我が家は、本人はごく普通の家庭であったと思ってはいるのだが、父はいえは静岡の寺の生まれで、祖父方は代々僧侶の家系であった。僧侶と言えば大昔は地域の文化人、知識人であったようで、一般に漢文にも通じていたといわれる。そのような訳か、数代前の親類には漢文教員が随分いた。祖父方の大叔父には唐代史研究から後に教育者になった児玉九十という人物もいた（その娘婿は広島大学で第1回ペスタロッツチ賞を受賞した児玉三夫氏）。祖母方は秋田藩校明徳館学長根本道明の弟子で漢学者の小野田亮正などという人もいた代々の書香門弟であった。そのようなことから、父の実家には仏籍、漢籍なども多く残っており、普通の家庭の子供よりは漢籍に馴染んでいたといえるかもしれない。私の母方についてはあまり多くが伝わらないが、高等師範を出て漢文の教員をしていたという外祖父のほか、漢文教員をしていたという親類は少なくなかったという。我が家は男2人兄弟であるが、兄の「敦史」は「敦煌」から、私の「泰史」は「泰山」から取ったと言われるように、両親が受けた漢文の影響は知らず子供の名づけにも影響しているほどであった。そのような環境に育って、私自身大学受験期には紆余曲折を経たが、結局は漢文を専門とする文学部中国哲学文学科へと進学することになった時には運命めいたものを感じていた（今にして思えば兄の名前と私の名前が反対だったらもっと運命的に感じていたかもしれない）。

大学3年の漢文を読むばかりの授業に飽きてきたころから金岡照光先生に数年間漢文と敦煌学の基礎を習った。とはいっても金岡先生は講義によって敦煌学を我々に伝えることはせず、ただ自身が所長を務める東洋学研究所で購入した敦煌写本のマイクロフィルムの焼き付け写真 25,000 枚の所蔵目録を作る仕事を我々に与えただけだった。我々数人のゼミ生は、最初は訳もわからぬままその仕事を始めたのだが、膨大な写真を前にとにかく写真一枚一枚を確認し、敦煌文献目録や大正新修大蔵経などと照らし合わせながら黙々と目録作業を行うしかなかった。それでも一通り 25,000 枚の確認が終わると、金岡先生は何だかんだと注文を加え、結局またやり直しということを繰り返した。その作業は3年間つづけられ、その間には私自身 25,000 枚の写

真を 4、5 回くらいずつ確認させられた。その頃は、この先生は何でこの様な意地の悪いことをするのだろうと思っていたが、しかしそうした写真全部を何度も丹念に見ていく作業は敦煌学研究を志す者にとっては最高の基礎学習となり、また題名と内容を確認する作業によって多くの新発見もあった。このような 3 年間の基礎作業を経て大学院修士 1 年のときに『スタイン・ペリオ蒐集 敦煌文献目録』が出版され、新発見として『衆経要集金藏論』や多くの唱導文学資料を探し当てることができたのであった。

その作業が終わる頃に金岡先生が体調不良により長期休養されるということで、金岡先生の勧めで 1 年半ほど復旦大学へ留学することになった。復旦大学には仏教文学では有名な陳允吉先生がおられ、1 年ほど金岡先生に代わって仏教文学の手ほどきを受けてくることになったのである。しかし、その留学出発間際になって金岡先生が 60 歳という若さで急逝され、帰ってくる場所を失って復旦大学の陳先生のもとに 10 年近くも居残ることになったのは予想外のことであった。このことによって随分と人生が変わっていったように思う。

陳先生のもとではまったく自由に仏教經典類を勉強させてもらった。先生の講義を聞きながらいろいろな仏教經典を読み、その内容について陳先生と討論するというのが中心で、本当にいろいろな經典に目を通すことになった。

そうして復旦大学で 1 年半ほどがたち、今度は日本と中国を往復する生活が始まった。中国での学費と生活費に困るようになっていたからである。いろいろ考えた結果、日本の大学の授業期間に中国語の非常勤講師などをして学費を稼ぎながら日本でしかできない勉強をし、休暇の間は中国で過ごすのがよいということになった。日本の大学では年間の半分近くが休みなので、年の半分を日本で研究生生活をおくり、残りの半分は上海で研究生生活をおくるというきわめて贅沢な生活であったと思う。

この頃には研究論文も発表するようになっていたが、さまざまな領域に足を踏み込まざるを得ない敦煌学を研究していた都合上、いろいろな先生のところ足繁く通って他領域の研究手法などについて学んだ。今から思えば迷惑な話であったが、その当時の先生方はいやな顔もせず相手をしてくださった。その頃一番お世話になったのが中国小説史の尾上兼英先生で、尾上先生

の研究室には3年くらい通ったと思う。敦煌仏教学と禅学を学ぶ為に田中良昭先生のもとに1年程通った。そのころ田中先生は駒澤大学副学長の重責におられ、授業を持っておられなかったが、お忙しい中でわざわざ講義を週2コマも開講してくださり、その時の学恩には今でも頭の下がる思いである。この頃は他大学でもどこでも勝手に授業を聴きに行くという無法を繰り返し、他にも新田幸治先生、進藤英幸先生、上野恵司先生にもお世話になった。

このようにして数年が経ち、そろそろ人並みに博士学位論文を書いてみたいという欲が沸いてきた。そのころ、中国での同級生はみなストレートで碩士課程（日本の修士課程にあたる）、博士課程へと進学し、早いものは27歳くらいで博士論文を書いて順調に就職していたのを羨ましく思っていた。その頃先輩には復旦大学の陳引馳氏や朱剛氏などがおり、学位を取って母校で働いていたのである。そこで博士学位のことを陳先生に相談してみるとすぐに引き受けてくださることになった。金岡先生がなくなられてからすでに7年が経っており、苦節7年にしてどうにか自らの人生の進む方向に光明を見出した感じであった。それから博士論文執筆が始まり、4年間かかってどうにか『敦煌変文写本の研究』を書き上げた。執筆時には2歳になっていた娘の子育てが重なり随分たいへんな思いをして論文を書いた。細君も2人目を妊娠中であったので子育ての負担が私にのしかかってきていたからである。仕事もしながら子育てをし、家事もこなして皆が寝静まっているときにだけ論文を書くという日々が続き、どうにか復旦大学での学位申請が無事終了したのであった。

学位取得後は敦煌学研究を深めていく為にもう少し文献学、文字学の知識を必要と感じ、陳允吉先生の紹介もあって、復旦大学卒業後は浙江大学古籍研究所の張涌泉先生のところで博士后（ポストドクター）として採用してもらうことになった。この浙江大学古籍研究所は大学合併前には杭州大学古籍研究所と呼ばれていたところで、訓詁学研究で有名なところである。そうした角度から敦煌学を研究された姜亮夫先生、蔣礼鴻先生、郭在貽先生といった中国学術界の巨人が在職されていた職場であり、金岡先生も憧れとしていた職場であった。そのような場所で身の引き締まる思いで2年間を過ごした。驚いたのはこの研究所では教員も含めてほとんどの者が朝早くから夜遅く

までものも言わずに研究しているところである。中でも一番頑張っていたのが張小艶さん、金澄坤君、朱大星君、葉貴良君などで、土日平日にかかわらず朝 6 時から夜 11 時までずっと敦煌写本の翻刻をしていた。張先生も正月の 2、3 日以外、土日も変わらず同じように毎日を過ごしていた。文献学、文字学をやる人のなかには、ここまでやる人間がいると知っただけでも収穫であった。皆がみな勤勉で、かつての南宋禅の中心地にあつて、皆が修行中の禅僧に見えてならなかった。ここではほかにも方一新先生、王勇先生、徐建平先生などにもお世話になった。このような研究所にわずか 2 年間という期間ではあつたが在席して、どうにか『敦煌講唱文学写本的研究』という報告書を書き上げることができ、その間にどうにか中国の学術界にも認められるようになり、浙江大学副教授に加えてもらうこともできた。

その間に実は日本での就職も決まり、しばらく日本と中国の職場で二足の草鞋を履くことになった。そうした二国の間に行ったためか、中国で敦煌学研究を 10 年も続けていながら、日本での研究が完全に理解されていないのではないか、こちらの言い分が完全に伝わっていないのではないか、というもどかしさを感じるが多くなっていった。その理由に気づかせてくれたのが、その後の日本国文学、民俗学との出会いだった。たまたま友人の高達奈緒美さんの紹介もあつて林雅彦先生の絵解き研究、唱導研究のグループに加えていただくことになったのであるが、そのグループ研究の中で、我々日本人の敦煌文学研究の奥底には、日本文学研究の奥底に流れる説話研究、唱導研究の影響があるということに気づいたのである。つまり説話研究、唱導研究の土台の上にすすめられる日本人研究者の学説は、中国人研究者にとって理解しがたい部分が多くあるのである。しかしそうした説話、唱導という角度からのアプローチはわずかな日本人研究者の手によって行われてきた程度で、敦煌の膨大な資料を相手に全面的な研究が行われてきたわけではない。研究の狭間にあつて、取り残されてきたともいえる部分なのである。その部分の研究をこれから先中国学者と一丸となつて進めていくのに必要なのは日本の唱導文学研究のこれまでの経緯やノウハウなどについて中国人研究者に正確に理解してもらうことである。それに気付いてから以降は、唱導文学について中国でたびたび話をするようになった。そのような成果か、最近では

中国研究者も大いに理解を示してくれるようになってきている。こうして進められているのが前節にも挙げた敦煌の唱導文学文献の研究というわけである。

以上のように、私自身、研究としては新たな展開に関与することができたわけであるが、それにしてもここまで来るのにはずいぶん多くの先生にお世話になった。中国の諺には「春風の中に坐するが如し」という言葉があるが、随分と長いこといろいろな方向から吹いてくる春風の中に坐っていた訳である。そして長い期間春風にさらされていなければならなかったのは、敦煌文学文献の研究が、いろいろな学問領域の蓄積を利用して多角的に捉えなければならぬ研究領域であったからである。そのように言うといかにも総合科学的な地域研究であると言えるのかもしれない。

(三)

現在、こうして総合科学研究科地域研究講座に所属するようになったが、近くにいろいろな学問領域の専門家がいたので、持ち前の好奇心によってこの機会をうまく利用して何かに使えないかという欲も湧いてくる。最近では放射性炭素や酸素同位体比の専門家とも親しくなる機会があり、さらには放射光研究所にまで出入りをさせてもらっている。それを無駄にせず自分の研究に応用させてもらおうと模索している訳で、たいへん有り難い研究環境であるといえる。

しかし、今の研究環境は自分にとっては最良の環境であると言えそうであるが、人材の育成という点では就任早々から戸惑うことが多かった。それは自分が習ってきたこととは異なるプロセスによって学生を指導しなければならないからであったと思う。

自分の研究を総合科学的な地域研究だとしておきながら、相反することを言うようだが、自分自身は中国哲学、中国文学を学部で習ってきたのであって、総合科学、地域研究を主専攻としてそうした学問体系や方法論を学んできたことはない。私の研究は前に長々と書いてきたような経験によってどうにかこれまでに纏められ、体系化されてきた訳である。これを短期間で学生にエッセンスを理解してもらわなければならないというのは大変なことであ

って、常に焦りを感じ、就任以来、試行錯誤が続いたのである。中国には「孺子教うべし」という言葉があるが、そのような意味では申し訳ないが始めの頃は周りにいた孺子を見つけることができないでいたようにも思う。始めは総合科学研究科の教育方針という本質の部分で理解ができずにいたのかもしれない。

我が総合科学研究科における総合科学とは何かということを考えた場合、研究科の概要には以下のように書かれていた。

『総合科学』は、21世紀の人類社会が直面する複合的課題に取り組むため、個々の専門分野を深化させるとともに、その融合・協同をつうじて未踏の知の地平を開拓する科学の方法である。

ここに、総合科学の方法論については「個々の専門分野を深化させる」と言っている訳で、自分のしっかりとした専門分野を持つことをまず認めており、そののちに「融合・協同」を行う、としている。つまりそれをもとに自分で新たに他領域を学ぶか、他領域の研究者と協力すべきであるということを行っているわけである。つまり、前提としては自分の研究領域というか、しっかりとした個をもってまずは問題を見据える必要があるということである。では、我々にとっては文学部的な手法によって文献講読の技術から伝授していかなければならないということであろうか。

地域研究にしても、これと同じようなことがホームページに掲載されている。やや長文であるが一応引用しておく。

地域研究領域では…(中略)…それぞれの分野に属する研究者は、歴史・社会・政治・思想・文化・民俗・文学など多様な研究領域にまたがっています。(中略)地域研究領域では、そのような時代の要請に応えるべく、学問の枠組みを超え、さらには時空を超えて、グローバルな視点から地域を、またローカルな視点から世界を、複眼的に理解する能力をもつ専門的知識人の養成をめざしています。そのため…(中略)…文明史基礎研究領域やその他の領域とも連携をとり…(中略)…広い視座をも

つ地域科学の研究方法を身につけることをめざして、総合的な地域研究にとりこんでいきます。

ここで少し注目していただきたいのは、まず指導者たる教員は「歴史・社会・政治・思想・文化・民俗・文学など多様な研究領域にまたがって」いるわけで、きちんと専門課程において専門の基礎教育を受けてきている訳である。そうした研究上の経験をもとに、学生に「複眼的に理解する能力をもつ専門的知識人の養成をめざし」、「個々の専門分野を深化させる」ために、個々の学問領域の蓄積ともいべき研究方法を学生に伝授しようとするわけである。

しかし、たとえば私のように中国哲学、中国文学の専門を主たる研究領域にしようとした場合、文学部、文学研究科のような漢文の講読や中国語文の閲読と解釈はできないであろう。漢文の訓練には文学部では学部で課程で数百時間の演習時間が設けられているのであり、外国語学部では中国語教育にやはり数百時間もかけられているのである。中国研究に限らず、外国の文献を読みこまなければならない地域研究ではどこエリアでも同じ問題は起こっているのではないかと思った。中国語がわからない学生が来るたびに、また漢文が読めない学生が来るたびに、まるで専門知識のないものを相手にしているようで、私の指導力のなさに対する嘆きと同時に、言いようのない不安のようなものが頭を駆け巡った。実のところそのような時期はしばらく続いたのであった。

(四)

ここに誤解を受けないように一言断っておきたいことは、私自身、このような問題に直面した経験を通じて、結果としてはこのような研究科に大変な期待をもっているということである。正直に告白すれば、分かっていなかったのは自分のほうであったと悟ったわけである。

確かに、中国学という点から見ても、漢文の訓練ができない、中国語の訓練はできないというネガティブな点が目立つわけであるが。そもそもこうし

たものは学校の課程によって身につけるものなのだろうかということである。文学部や外国語学部ではたしかに膨大な教育時間が用意されているが、しかし日本の大学の課程で用意されている教育時間数が絶対的に不足していることは中国の大学での教育時間と比較してみればあきらかである。

中国の大学教育というのは、教育課程が熟慮されており、何よりも学校教育と予習復習によって基本的な内容が習得できるよう整備されている。あらゆる分野において教材も全国统一教材的な教材が多く作成され、それに合わせて時間もしっかりと確保されている。例えば日本語教育で言えば、大学教育だけで3,000時間ほどの学部全課程の中で日本語教育には2,000時間前後が用意されており、この課程を修了すれば古文も含めてかなり高度な日本語を使いこなせるようになることになっている。加えて言えば、もともと中国は科举試験の伝統があり、統一教材整備を基本として暗記を中心とする教育が行われている国であることは知られている通りで、日本語教育においても2,000時間の授業時間のほかに、予習復習などによって相当時間が暗記に費やされている。こうした教育に中国人学生の高い日本語力が支えられているのである。ちなみに言えば、日本での外国語教育の時間などは大学での教育時間1,600時間のうちのせいぜい500時間程度なのであって、一見して時間でも教材でも太刀打ちできないかに見える。

しかし、日本の教育はある一面でこうした教育を受けてきた中国人には不可思議に映るほど成功している。中国人学生の日本語に負けないレベルで中国語を操る日本人というのも珍しくはない。中国人学者以上に漢文を読みこなす日本人もかなりいる。話を広げればこうした短いといわれる教育時間の大学教育に日本の高い科学技術が支えられてきたという事実もある。数々のノーベル賞も受賞し、技術革新も推進してきたことは言うまでもないであろう。こうした現状に対して、多くの中国人研究者が奇異の目を以て日本の教育を見ているという話をよく耳にする。

日本の大学教育の良さは、私の目から見た場合、自分で自在にプランニングできることにあると思っている。授業時間以外に有り余る時間を利用して、好きなことができるようになっている。往々にしてそうした時間を上手に利用できる若者とそうでないものに別れてしまうくらいはあるが、上手にプラ

ンニングできるものは膨大な時間を自分の好きなことに有効に利用できることになるのである。さらに日本にはこのように学生によってプランニングされたものをサポートする環境がある。中国では既成のプランに外れてた場合には排除に向けて強力な力が働くが、日本ではそのようなことはあまりない。一人でこもってもくもくと趣味に忙しい日本の若者は多いであろう。日本の若者は、好きなことに没頭することができる能力も、環境も持っているのである。とくに中国の教育と比較してみた場合、有り余る時間があり、若者は好きなことに没頭し、環境がそれをサポートするという点に日本の教育の良さがあるように思われてならないのである。

話を中国学に戻せば、漢文がいくら好きであっても文学部の課程だけで自在に読めるようになることはないであろう。中国語がいくら好きではあっても、大学の授業だけで自在にコミュニケーションができて多くの本を読みこなせるようになるということとはもともとあり得ないことなのである。それゆえに、漢文ないしは中国語に本当に興味を持っている日本の若者は、自分で方法を考え、留学などを交えながら自力で足りないところを補う力を確かに持っている。

そのように気づいた時、わが総合科学研究科ではまさに学生によるプランニングという点ではきわめて大きな可能性があるように思えるのである。授業は様々な興味を持つ学生によって討論形式の講義が中心であり、学生の興味を持つテーマは常に異なる専門領域からの視線にさらされており、領域外の視点から不足に思われる箇所は直ちに指摘され、そうしたことを経ることによって研究に膨らみを持たせることに役立つであろう。そして必要に応じて自分の研究に必要な基礎力は自発的に補っていけばよいということである。専門知識を補いたいと思った時には、先の要綱にもあるように、あらゆる分野のスタッフが研究科内に配置されている。必要に応じて講義を聞きに行けばよい訳である。

大切な点は、こうした研究スタイルであることを学生自身が自覚していることであり、自らプランニングできるこの環境を無駄なく利用していかねなければならないという点ではないだろうか。そうしたなかでの教員の役割は、そうした学生の研究をサポートすることに他ならず、環境を提供し続けられ

るように努力を続けることであろう。与えられることに慣れ、与えてもらうことを期待してくる学生からは不満の声も聞こえてくる。しかし、私自身のこれまでの研究経験を振り返って見ても、研究とは自らプランニングすることであって、こうした研究スタイルを正しく自覚して、初めて大きな研究成果へと成長していくのではないかと思えてならないのである。